



鹿島田浩二 2008年6月撮影
世界選手権を目指してトレーニングの日々

「世界選手権で 10 年後に入賞とか、今は無理かもしれないけれど、そういうビジョンがあってもいいと思う。」

昨年 11 月に開催したシンポジウムである選手がこう発言した。

最初その言葉に私はどこか違和感を持った。世界で 20 年近く走ってきた分、世界のハードルの高さを痛感してきた。染み付いた感覚がそういった夢のある思いを無意識に拒否したのかもしれない。あるいは過去 10 年の結果を描いたグラフをどこまで外挿しても、「入賞」というレベルに到達するようには見えなかったからかもしれない。

しかし考えてみれば、過去の経験や数字に囚われた哀れな習性だったかもしれない。見渡してみれば、競技には夢のあるビジョンから生まれた飛躍がつきものである。成功は多くの場合綿

密な計画に従った成長ではなく、どこかで当事者も予測しない進歩を生むものだ。偏曲点ともいうべきだろうか。それは個人の選手でも組織でも同じことだと思う。そういうことをここ数年、周りのスポーツや選手の成長を見て感じる機会があった。

さて、話を移そう。今年の WOC2009 はハンガリーで開催される。男子 5 名、女子 6 名の選手が世界の舞台に挑戦する。

今年のチームは、男子加藤、女子番場というチームの核を中心に、藤沼、関谷といった初出場の若い選手も加わってバランスのよいチームだといえるだろう。WOC2005 体制からの脱却が課題の一つであったため、次の世代への一歩を踏み出したといえる。ここ数年選手の取り組みにも変化が現われてきた。従来のロング、ミドル重視から、スプリントへの移行である。地理的ハンデの少ないスプリントを中心とした選手の自主的な取り組みが見られ、国内のレースで結果を出している。

また今年はリレーへの取り組みを男女ともに重視している。国としての実力を明確に表すリレーは、メンバー全員の目標を共有することが重要なことはいままでもない。慎重な議論を進めてチーム作りに勤めてきた。男子は 15 位～20 位を一つの具体的な目標として準備を進めている。

これら準備の結果はもうすぐ 8 月に皆さんの前に出ることになる。そして良かれ悪しかれ、これらの結果を受けて、今後の活動の方向性を練ることになる。

私はこの 7 月から強化委員長としての命を受けた。自分自身昨年まで世界の舞台で走っていた身として、今の自分に何ができるだろうか。この大役に少なからぬ重圧と不安もある。しかし選手の感覚をまだ忘れてない自分にしかできない何かがあるのではないかと考えている。

私の抱負を敢えていえば、任期中に「偏曲点」を向かえることであろう。ターニングポイントといってもよい。逆風から上昇気流に乗ることだ。

気まぐれの風を掴むように、ただ呆

然と待つのではない。その風に乗るには、努力と総意工夫が必要だ。選手と一緒にそのきっかけを探すこと、引き寄せること、掴むこと。

今の選手の系譜には風を呼び寄せる潜在的な力はあると感じる。だから我々は、選手強化、若手育成など様々な形でその力を発揮する芽を大切に、チャンスを生かしていくことが大切だと感じる。

そしてもし偏曲点が訪れたなら、それは日本代表に限らずオリエンテーリング界全体のターニングポイントになるに違いない。閉塞感をもつ今のオリエンテーリング界が再び浮上すること、それは我々の目的を達成することと同義であるといっていよう。

もう一つ、前述のシンポジウムで印象的な発言があった。

「何事も楽しく。」

我々は強化側も選手もほぼ完全なアマチュアであることを思い起こさせてくれた。我々の全てのエネルギー源は金銭的な対価ではなく、よりシンプルな興味であり、パッションである。であるとしたら、方法はちまたに溢れる組織の一般論とは異なるはずだ。個々のモチベーションを最大限尊重していくこと、それが全体の成果に結びつくことはいままでもない。

そういう意味で、我々組織の力だけでは活動に限界がある。オリエンテーリング界の中に存在する、日本代表を応援するエネルギー。今は散発的かもしれないこの貴重なエネルギーを束ねて、選手の飛躍の一旦に繋げることに、これも我々の重要な任務と言えるだろう。

(鹿島田浩二)



2008年3月撮影 全日本大会
優勝の番場洋子と鹿島田浩二